

◎ 連合会だより

労働者協同組合は、今、大きな転換点にたっているという認識がますます深まっています。

高齢者協同組合運動の切り開いた新たな条件を生かし、時代の要請に応じていくため、新しい運動と事業、組織を創造すること、基礎組織を再定義し活性化すること、この二つがわたしたちの最重点の課題になってきていると思います。

「これまで軽視ないし無視されてきた女性や障害者、子ども、外国人のうちに社会をかえていくエネルギーがいっぱい蓄えられている」「女・高・障・子・外が日本を変えていくキーワード」(山脇完治・東邦学園大学教授)という指摘は、高齢者協同組合、女性の仕事おこし、学生と大学、そして農民の運動との合流と新しい豊かな目標の設定という労働者協同の運動の方向にも大きなヒントになっています。

また、企業社会は市民生活を無視してきた結

果、地域から生命の再生の場としての機能を奪いました。

新しい仕事おこしは、生命、労働、地域を再生する協同事業です。いずれにしても、力がなくては、口先だけのことに終わります。力の源は基礎組織が労働者協同組合になりきっていくこと、そのために、現在の到達点を踏まえ、組合員が最高最大の力を発揮しうる基礎組織の再定義とし、活力を引き出すことが重要です。

仕事を起点に人を組織した労働者協同組合は、よい仕事、労働の人間化を通じ、成長してきました。人を起点にした高齢者協同組合は、労協の仕事おこしと仕事の改革について大革命をもたらそうとしています。地域の要請にこたえられる一人よがりではない組織へ発展していくことに未来があります。

鍛谷 宗孝(労協連合会・専務理事)

◎ センター事業団だより

いよいよ総会・総代会の季節。1年間の歩みを振り返ると共に、1年先の夢を語り合い、道筋を描く大事な時期である。事業計画づくりへの組合員の参画は、レイドロウ報告の中でも強調されていた重要な取り組みであるが、参画すれば一人一人にとって必然的に主体的な計画遂行の意識を高める、というものでもない。計画そのものの実行段階において、どれだけその当事者であることを意識し続けるかは、ここ数年の取り組みでも難しさが続いている。プランニングに参画すること、実行主体になるということは、つながっているが、個別の課題でもある。この点で、前者の取り組みはかなり定着してきた(とは言っても、本当の意味で組合員の意見の総和となり切っている事業所はまだ少なく、所長の思いや作文で終わってしまっている所が多い)が、実行段階での組合員の参加や、計画に対する意識は、不完全といわざるを得ない。しかし、これは問題意識を持たずに来たのではなく、挑戦し続けている中で

の難しさを物語っているのである。今回は、社会の矛盾が身近な生活の場面で様々表面化してきた期において、自分たちの存在ややろうとすることが見えやすい環境下にある。その意味で、理念・理想と現実の間の道筋が真剣に考え合える場面として計画づくりを捉え、多くの事業所が取り組みを進めている。

理想と現実のギャップ、この認識は肯定的・積極的に考え合わねばならないし、営みの価値を問う上で、双方との関係は欠かせない。個人の意識レベルにおいても、己の位置や価値観を確認し形成していく大事な時代が今なのだろう。高齢者にとっても中高年にとっても若者にとっても、自分が輝く光源を膨らまし、多くの光が交錯し織りなす社会を夢見つつ、今の時代、今の社会の当事者として、組合員も組織も大きく変わっていくこと。今度の総代会という「場」を、そんな決意を固め合う場として向かえたい。

古村 伸宏(労協センター事業団・事務局長)